

2011 年度
ネパール視察
報告書

2011 年 10 月 21 日（金）～ 2011 年 10 月 29 日（土）

財団法人国際労務管理財団

2011年11月29日

ネパール視察報告

財団法人国際労務管理財団

1. ネパール視察 概要

日 程：2011年10月21日（金）～2011年10月29日（土）

訪問国：ネパール連邦民主共和国

訪問先：①株式会社マナカマナパワーネットワーク

②トパ国際教育センター（ヘタウダ校、カトマンズ校、ポカラ校）

③モメントアパレル社 ジャバ工場

④マカワンプール郡ハディコラ村の農家

⑤カトマンズ市内

⑥その他

訪問者：中迫節子理事、高橋綾子

2. ネパール国 概況

- 国 名：ネパール連邦民主共和国
- 人 口：2,804万人
- 首 都：カトマンズ
- 言 語：ネパール語
- 宗 教：ヒンズー教徒（80.62%）、仏教徒（10.74%）、イスラム教徒（3.6%）他
- 通 貨：ネパールルピー ※1ネパールルピー＝0.95676円（2011年10月21日現在）
- 識字率：53.7%（2001年、国勢調査）
- 主産業：農業、カーベット、既製服、観光
- 1人当たりGDP：436ドル（約33%が農業）※日本：39,530ドル（2009年、総務省統計局）
- GDP実質成長率：6.5% ※日本：-5.2%（2009年、総務省統計局）
- 主要貿易品目：
 - 輸出：工業製品、既製服、カーベット、食品（紅茶、香辛料等）
 - 輸入：石油製品、糸、化学肥料、輸送用機械
- 主要貿易相手国：
 - 輸出：インド、アメリカ、バングラデシュ、ドイツ、中国
 - 輸入：インド、中国、UAE、インドネシア、シンガポール

注）出典明記のないものは外務省ホームページ、在ネパール日本大使館資料より抜粋

3. 訪問先

① 株式会社マナカマナパワーネットワーク

JITCO 認定の送出し機関。本社はカトマンズ市にあり、会長はカピル・デブ・タパ氏。ネパール政府より外国雇用にかかるライセンスを取得している。従業員 5 名。送出し事業としては、2009 年 2 月に農業職種の技能実習生 5 名を大分県に送出したのが最初で、以後合計 130 名の技能実習生を送出している（農業：120 名、縫製：10 名）。直近では 11 月 25 日に長崎県へ農業職種の技能実習生を送出す予定。カピル会長をはじめ、スタッフのアディカリ・サントシュ氏も日本語が堪能。今回の視察にはサントシュ氏が通訳として同行してくれた。

提携する日本語学校は「トバ国際教育センター」といい、カトマンズ本校ほか全国各地に拠点がある。技能実習生はこの教育センターで 6 ヶ月から 9 ヶ月の間、日本語や日本のマナーを学習している。



マナカマナ社の外観



カピル氏(中央)と
監督管理のカナル・ラグ氏

② トバ国際教育センター

マナカマナ社のカピル氏が会長を務める日本語学校。技能実習生のほか、留学生のための日本語教育を行っている。学校は全国各地にあるが、今回はヘタウダ校、カトマンズ本校とポカラ校を訪問した。学生は新聞やラジオを通して応募をかけている。授業料は 6 ヶ月 10,000 ネパールルピー（NPR）。1 ヶ月では 2,000 NPR。

➤ ヘタウダ校

ネパール国のマカワンプール郡ヘタウダ市にある。ヘタウダ市はカトマンズの南方にあり、車で約 6 時間の場所にある。教師は 1 名で、ニルマル氏という男性。日本に 1 年間の研修経験があるという。ただ、サントシュ氏によると 11 月には日



学習中の技能実習生

本人教師が来る予定とのこと。

ここでは上述した 11 月 25 日入国予定の技能実習生 17 名（農業職種）に会うことができた。日本語学習歴は 5 ヶ月。3 名が日本語で自己紹介をした。氏名、家族、趣味など基本的な内容で暗記した感否めないが、元気よく話してくれた。さらに、日本について簡単なアンケートを取り、書く力をチェックした。漢字を使わず、分かりやすい質問に絞ったつもりであったが、実際にアンケートを取るときは質問内容が理解されず、通訳を要した。

文法はある程度修得できているが語彙が少なく、質問の意味を理解できていない或いは表面的な意味でしか捉えられていないと感じた。N5 に満たないレベルであれば、六甲の集合講習でも語学力の差が出てくるだろう。母国での学習環境の改善を求めるとともに、入国後の講習でも今まで以上に語彙チェックに力を入れる必要がある。また、最終的な手段だが、農業職種に必要な言葉だけでも集中的に学習するといった対応も考えられる。

ニルマル先生に日本語の難しい部分を聞いたが、現在・過去・未来のそれぞれで動詞が変化すること。漢字、カタカナの修得だという。

➤ カトマンズ本校

現在は留学希望者 30 名、来年 4 月入国予定の技能実習生 3 名が在籍している。教師はすべてネパール人で計 6 名、うち日本への留学経験者は 2 名。ヘタウダ校で学んだ技能実習生も在留資格認定証明書が下りてからはこちらの本校で日本のマナー等を学ぶ。

現在在籍している技能実習生は縫製職種で、後述のモメントアパレル社が所属機関。2012 年 4 月に入国し、熊本県の企業へ配属される。彼女たちはマナカマナ本社の空き部屋に住んでおり、



自己紹介をする技能実習生



ヘタウダ校の外観



カトマンズ校の玄関

本社を訪問した際に会うことができた。日本語を学習し始めて2ヶ月、さらに私たちが突然訪ねたため驚いた様子だったが、「こんにちは」「元気ですか」など簡単な会話も聞き取れておらず、今後の習熟に若干の不安が残った。

➤ ポカラ校

中央ネパールに位置するポカラは、カトマンズから西へ約200キロ、車で約7～8時間の距離にある。自然豊かなフェワ湖とアンナプルナ連峰を望み、外国人観光客の多い避暑地としても知られる。同校はポカラ市中心部にあり、留学希望者が計18名在籍する。学生は福岡、名古屋、静岡などの専門学校への留学を希望しており、目下猛勉強中だ。教師4名。



ポカラ校 学習風景

【送出し機関・日本語学校 総括】

カピル氏によると、技能実習生に対して入国前にN4取得を条件にするといった対応は取っていない。学習教材は「みんなの日本語 初級シリーズ」。特にテストも実施していないが、入管法で定められた下限の160時間を大幅に上回る400時間をかけて学習指導しているという。今回の訪問はティハールと呼ばれる祝祭日の最中であったため、カトマンズ本校の日本語教師が不在で具体的な学習方法まで聞くことができなかったが、すべてネパール人教師であることなど改善の余地は見られると感じた。

また、農業職種についても、現在の日本では有機農法や無農薬栽培など付加価値のある作物が求められ、こうした作物しか高く売れない状況になっている。市場の品質への要求もかなり高い。日本に実習に来て農業の現状を効率よく学んでもらうためにも、事前学習の時点で日本の農業の現状について理解を深めておいて欲しいと感じた。

③ マカワンプル郡ハディコラ村の農家

トバ国際教育センターヘタウダ校で学ぶ技能実習生の実家を訪問し、耕作地などを視察した。彼女は11月25日に入国予定。

現場はマカワンプル郡ハディコラ村にあり、ヘタウダ市内より車で20分の場所から、さらに



農家は大きな川を渡った先にある

山道を約 20 分かけて歩いた場所にある。ネパールでは車が入れる道が限られており、人々が住む生活圏内でもこのように川に遮られ、途中から歩くほかない所が多い。

栽培作物はカリフラワーとキャベツ、タマネギなど。技能実習生の父、シャム・ラル・ギリさんと家族 5 名で栽培している。

トンネル設備もあったが、栽培作物から見て施設園芸作業ではなく畑作・野菜作業での受入れが適当と考えられる。栽培方法としては、播種→育苗・定植の過程はあり、トンネルは夜間のみ設置するという。

マナカマナ社のサントシュ氏によれば、シャムさんの家は比較的裕福で、耕作地の規模、設備ともにネパールでもかなり高いレベルだという。前述の日本語学校の費用を考えても、技能実習生に応募する人の家庭環境は一定の水準にあることが伺えた。

広い耕地だったが複数の家庭が集まって作業をしており、明確にどこまでがシャムさんの耕地かは説明できないという。耕地の一区画では稲作が行われていたが、稲穂の部分が黒ずんでおり何がしかの病害虫に犯されていると思われる。



右上でキャベツ、左下でタマネギを栽培。夜間はトンネルで覆う



カリフラワーの栽培



シャムさん一家と

④ モメントアパレル社 ジャバ工場

ネパール国の東端、ジャバ郡バドラプルにあるモメントアパレル社の工場。本社はカトマンズ。バドラプルへはカトマンズから国内線で約 45 分、工場はバドラプル空港から車で 5 分ほどの場所にある。バドラプルはインドとの国境の町で、途中インドからカトマンズに向かう学生にも出会った。

ティカ・ラジ・ダカル社長とレム・ナス・チ



工場内部

ユダル工場長が対応してくださった。従業員は約 700 名。主にワイシャツ、ズボンなどを扱い、ほとんどがインドへ輸出する高級品だという。生地は購入するが、その後の裁断、裁縫、アイロン、包装まで一手に手がける。現在、マナカマナ社を通して 10 名の技能実習生を送出しており、来年 4 月にも 3 名を送出す予定だ（前述したカトマンズ本校で学習中の 3 名）。

裁縫部門では 6 つのラインに分かれ、1 ラインには約 50 名の従業員が従事する。ラインごとにマネージャーがおり、各従業員の出来具合を細かく確認し、完成までに計 3 回のチェックを経ることになっている。1 人当たり、毎日最低 10 枚のシャツを縫うことがノルマであり、ラインごとに生産枚数を競わせているという。従業員はほとんどが女性だったが、中には男性の姿もあった。工場全体では 1 日約 4,000 枚を仕上げている。

裁縫の作業は非常に手際がよく、従業員が作業に手馴れている印象を受けた。裁断は特に技術の高い従業員が担当し、防護のため鉄製の手袋をはめていた。ただ、裁断、縫製、パッキングがそれぞれ別工場にあるうえ、作業位置に工夫がなく、工程の流れに少し無駄があるように感じた。

給与は月給 8,000 NPR。ネパールの大卒の平均月給が 10,000 NPR、大卒以外は 5,000 ~ 6,000 NPR（マナカマナ社、サントシュ氏談）であることから、比較的待遇は良いと言える。

ティカ社長は現地の商工会議所の会長を務めており、縫製業だけでなく地域の農業においてもネパールの技術向上に力を入れている。日本から技術者や JICA ボランティアをこの地に招聘して、技術を伝授してくれるシステムはないかと尋ねられたが、給与や宿舎は日本側が用意するのが条件といい、I. P. M. からは帰国した技能実習生の活用を提案した。



マネージャーが作業を管理



裁断専門の従業員



完成品にタグをつける



中央がレム工場長

レム工場長は「若い人は技能実習生として海外へ行くことができるが、長年ここで勤めて技術もある年配の女性にも日本へ行く機会があれば良いのに」と話され、工場長の優しさとともに厳しい現実を見た。

⑤ カトマンズ市内

カトマンズは標高約 1,300 メートル、周囲を山に囲まれた盆地に位置する。ネパールの首都であり、政治・経済・行政の中心地である。古くはカンティプール（栄光の都）と呼ばれ、数々の寺院が建てられるなど高い文化を誇ってきた。ただ、最近では急速に近代化が進み、車、バイクが増え、至る所で交通渋滞を引き起こしている。大気汚染も甚だしい。

カトマンズといえば、旧王宮や多くの寺院が集まったダルバール広場が有名だ。野菜やお菓子などを売る露店が軒を連ね、店の間をたくさんの観光客が散策を楽しんでいた。欧米からの観光客が多く、カトマンズとともに、ヒマラヤのトレッキングやポカラ観光なども人気が高いようだった。ただ、観光地の入場料は外国人用価格が設定され、インドやネパールといった SAARC（南アジア地域協力連合）諸国の観光客と比べ、4 倍近い値段の場所もあった。

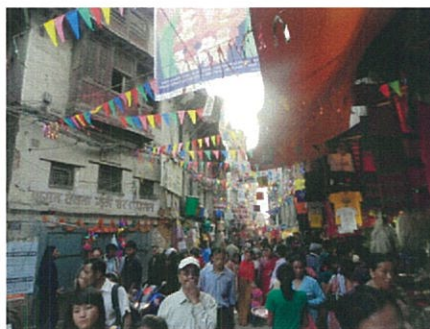
もう一つ、カトマンズの魅力と言えばバザール。店先には食料品や民族衣装、雑貨など、ありとあらゆるものが並んでいる。通りは活気にあふれ、交通、商業の要衝として栄えてきたカトマンズの歴史を、ひしひしと感じた。

ネパールは鉄道や高速道路が整備されておらず（一部有とのこと）、カトマンズからの移動は飛行機かバスとなる。今回はマナカマナ社の車を利用したが、主要都市間の移動は 6～8 時間ほどを要した。車中カトマンズでは見られない農村の様子や、人々の暮らしを垣間見ることができ、興味深く感じた。

ネパール料理はカレー味が基本。定番はダルバートと呼ばれる定食料理だ。豆のスープ、ご飯、肉料理（鶏、ヤギ、羊など）、漬物が一つのお皿にのっており、追



ダルバール広場



バザールの風景



名物のダルバート

加も自由にしてくれる場合が多い。また、特産品はインドに近い東ネパールでとられる紅茶、ショール・カバンなどの織物、コーヒーなどが有名。タンカやマニ車といった仏教用品も売られている。

⑥ その他

➤ JICA シニアボランティア 六車哲郎氏

JICA シニアボランティアの六車哲郎氏は 2011 年春から、ネパールで農業分野の技術支援を行っている。長年 JA 香川に勤務し、その経験をもとにネパールへの技術移転を図りたいと考えている。カトマンズ滞在中に懇談の機会を得た。

六車氏によると、現地の農業はいまだ自給レベルであり商業用には至っていない。

今後は個人農家が個人のために作るのでは

なく、農業協同組合を組織し一定の資金力をもとに、傘下の農家が活動できるようネパール政府に働きかけていきたいとのことだった。

こちらからは I. P. M. の事業を一通り説明。農業の技能実習生についても関心をもっておられ、「今必要なのは現場で技術を教える人。ボランティアや青年海外協力隊だけでなく、現場の指導者が必要だ」と話されていた。六車氏自身、現場の指導者として活躍されており、ネパールの農業事情に精通した方として今後も指導を仰いでいきたい。



右から 2 番目が六車氏

➤ ディワスネパール リタ・カナル代表

ディワスネパールは女性の地位向上、教育環境の整備などを目的に設立された NGO。カーストや宗教、性別などを越えて平等な教育を受けられるために、全国各地に女性を対象にした学校を設立している。代表のリタ・カナル氏はその先頭に立って宣伝、抗議活動などを実施。支援を集め、世界に向けてメッセージを発信し続けている。



中央がリタ・カナル代表

カトマンズ滞在中にリタ氏と会食する機会を得、日本人のネパールに対するイメージや日本の今の女性像などを意見交換した。リタ氏は「いつになったら、

お2人（中迫理事と高橋）のようにネパールの女性が会社を代表して海外に行くのでしょうか」と話したのが印象的だった。I. P. M. からは「日本も徐々にではあるが保育所が増え、女性が働きやすい環境が整ってきている。こうした流れも女性の先輩たちの活動が影響しており、今のリタさんの活動が実を結ぶ日が来る」と答えた。

➤ リムナ小学校

ディウスネパールが設立した女性の学校で、小学校の一部を借りて運営している。ヘタウダ市中心部から車で30分ほどの場所にある。授業は小学校が始まる前の午前7時から8時までの間、地域の女性を対象に国語や算数などを教えている。年齢層は21歳から65歳まで幅広く、歩いて1時間をかけて通学する人もいるという。主婦が多いようで、子供が外で母親の授業が終わるのを待っていた。



中迫理事は「日本も以前は家庭に入る女性が多かったが、今は仕事を持ちながら子育てをする人が増えている。皆さんが学ぶことで子供さんを教育し、海外に羽ばたけるような人材を育てていきましょう。この努力がきっと将来につながります」を挨拶し、学生も「遠くから来てくださってありがとうございます。60歳になってこんな教育を受けられるのは大変ありがたいです」と話していた。

➤ スリーラクシミ小中学校

こちらもディウスネパールが設立した小中学校。生徒数434名。男子生徒より女子生徒のほうが多い。1週間は日曜日から金曜日まであり、休みは土曜日のみ（これはネパールの標準）。授業は1日7コマ、1コマ45分。国語以外の授業はすべて英語で行っており、地域では学習熱の高い学校だという。シュリーラム・ダハル校長によると、高校への進学率は100%、うち4割は大学へ進学するという。中学校のクラスを拝見し、女子生徒に将来の夢を聞いたら「医者になって貧しい人の役に立ちたい」と目を輝かせて答えてくれた。



➤ リライアンス インターナショナル アカデミー

カピル氏がアドバイザーを務める大学、高校、小中学校。写真は新設の学校で上層階は大学（準備中）、下層階は小学校になっている。小学校は日本の学校の特徴を取り入れ、机を果物の形にするなど工夫が凝らされていた。こちらでも英語で授業が行われており、同国の英語熱の高さが伺えた。



4. 総括

今回は送出し機関だけでなく、日本語学校や技能実習生の実家を訪問し、まさに送出しの現場を見ることができた。工場や農地耕作地を見る限りでは、縫製、農業ともに実地経験があることは分かった。日本での技能実習を通して、更なる技術の向上を図ってほしい。

ただ、技能実習生の日本語力については、日本語学校での指導に改善すべき点があると感じる。テキスト等は標準的なものを使用しているが、期間中どのようなカリキュラムを組み、具体的にどのような授業をしているのか。日本語教師とのやり取りでも日本語に窮し、通訳を要した部分があった。学習時間は多くあるので、非常に勿体ない印象を受けた。具体的に受入れが進んだ場合は、実際に I. P. M. の日本語教師が指導に対する改善点を提示するなど、別途対応が必要と考える。

さらに、マナカマナ社に対しては、日本語だけでなく日本の農業事情、縫製業界の動向などの概略を説明しておいて欲しいと要望した。現場を見る限り、農業は自給自足の域を出ておらず、商業用とはいえ地域で売るレベルであれば品質に対する意識もそう高くないだろう。今後も日本の産業は高付加価値商品の展開で生存を図るであろうし、来日してからのギャップを埋めるためにも、素養としての教育は行っておいてもらいたい。

ネパール国を全体的に見て、産業は農業、縫製業、観光業に委ねるところが大きく、工業化の足がかりが乏しいと感じた。経済的には海外からの経済協力や他国への出稼ぎ、外国人観光客に頼っており、流入した外貨を国の発展にどう生かすかというビジョンが、今後より一層求められていくだろうと感じた。

5. おわりに

今回のネパール視察につきましては各方面からご協力をいただき、無事に任務を終えることができました。関係各位に厚く御礼申し上げます。

2011 年 11 月 29 日